

「歴史の里」基本構想

平成21年3月
名古屋市教育委員会

はじめに

名古屋市守山区上志段味地区は、国史跡白鳥塚古墳をはじめ数多くの古墳が築造された地域です。そして、「歴史の里」はこれらの古墳群の保存・整備をめざした計画で、昭和56年の名古屋市文化財調査委員会からの提言に基づき、昭和63年に策定した名古屋市新基本計画に登載しました。しかしながら、計画予定地のほとんどが民有地で古墳の発掘調査が困難であったため、これまで基本構想の策定にとりかかるまでにはいたりませんでした。

平成17年5月に、上志段味特定土地区画整理事業において仮換地指定が行われたことにより、志段味古墳群の本格的な発掘調査が可能となり、基本構想策定のための基礎的資料を得ることができるようになるとともに、貴重な発掘成果をたくさん得ることができました。

これまでの発掘調査成果などをもとに、考古学、地質学、造園学の専門家及び学校関係者で構成する「歴史の里」構想検討委員会で、上志段味地区に残る古墳群を河岸段丘などの自然とともに保存・整備・活用を図るための基本的方向性を約1年間にわたってご検討いただきました。

このたび、本市教育委員会は、検討委員会での検討結果等を踏まえ、ここに「歴史の里」基本構想を取りまとめました。

平成21年3月

名古屋市教育委員会

目 次

第1章 構想策定の背景と枠組み -----	1
(1) 基本構想策定の背景 -----	1
(2) 構想の枠組み -----	2
第2章 構想対象範囲周辺の環境 -----	4
(1) アクセス -----	4
(2) 自然環境 -----	5
(3) 社会環境 -----	6
(4) 歴史的環境 -----	7
第3章 構想対象範囲の概要 -----	9
(1) 敷地条件 -----	9
(2) 観光レクリエーション -----	11
第4章 志段味古墳群の概要と特徴 -----	12
(1) 志段味古墳群の概要 -----	12
(2) 志段味古墳群の特徴 -----	15
第5章 構想対象範囲の整備活用の方向性 -----	16
(1) 構想対象範囲の有する特性 -----	16
(2) 整備活用の基本的考え方 -----	17
(3) 整備活用の目標 -----	18
(4) 構想対象範囲の地区区分と拠点地区の設定 -----	19
(5) 地区区分別整備構想 -----	22
(6) 各拠点地区の整備方針 -----	23
(7) 活用構想の検討と事例 -----	28
(8) 事業実施に向けて -----	29
○検討委員会委員等及び検討経過 -----	30

資料編

第1章 構想策定の背景と枠組み

(1) 基本構想策定の背景

名古屋市の東北端に位置する守山区上志段味は、国史跡白鳥塚古墳や志段味大塚古墳等に代表される数多くの古墳が築造された地域で、古墳時代前期・中期・後期と全時期を通じた古墳が比較的良好に遺存している愛知県を代表する古墳の密集地である。しかし、昭和38年に守山市(現・守山区)が名古屋市に合併されて以来、徐々に住宅地等の開発が進み、いくつかの古墳は消滅していった。

昭和63年8月に策定された「名古屋市新基本計画」において、「志段味ヒューマン・サイエンス・タウン構想」が掲げられた。平成5年には、守山区上志段味の面積約195haの区域が名古屋都市計画事業上志段味特定土地区画整理事業として決定され、志段味ヒューマン・サイエンス・タウン構想を活かした計画的な市街地整備が施行されることとなった。

一方、地域の歴史や文化を語るうえで欠くことのできない国史跡白鳥塚古墳や志段味大塚・大久手古墳群をはじめとする古墳の保存と整備活用、並びにこれら古墳の築造と深い関わりをもつ河岸段丘等の地形の保存は、本市の文化財保護行政上の重要な課題であった。

そのため、名古屋市教育委員会は貴重な文化財である古墳群とその立地する自然地形の保存が図れるよう都市計画関係部局等との協議を重ね、志段味大塚古墳や東大久手古墳、西大久手古墳が分布する面積約6haの用地(上志段味特定土地区画整理組合保留地等)については、地形を含めて保存する方針を立てた。そして、上志段味地区に残る古墳群や自然資源を活用し、「歴史の里」として郷土の歴史・文化の学習と自然体験ができる体験型の施設の整備を図ることを計画した。

しかしながら、具体的な「歴史の里」の整備には、用地の公有化、発掘調査等各種調査の実施、財源の確保等、今後なお解決すべき課題も少なくない。

このような状況を踏まえ、今回策定する基本構想は、先に述べた面積約6haの用地内に残る古墳群のほか、国史跡白鳥塚古墳、市史跡白鳥1号墳や、市内最高所の東谷山尾根部に残る3基の古墳を含む区域を構想の対象範囲と定め、貴重な文化財である古墳群やその立地する自然地形の保存と活用を図るとともに、豊かな歴史文化と自然にあふれた魅力的なまちづくりの中核的施設となることを目指した「歴史の里」基本構想を策定することにしたものである。

(2) 構想の枠組み

① 構想の目的

「名古屋新世紀計画2010 第3次実施計画」(平成19年6月策定)には、「歴史の里」は、上志段味地区に残る古墳群や自然資源を活用して、郷土の古墳時代などの学習と自然体験ができる体験型の施設として整備を図ることが掲げられており、「歴史の里」の整備は、名古屋市総合計画のひとつの実践である。また、名古屋市守山区上志段味地区にある国史跡白鳥塚古墳の早期の整備活用や、今も良好に遺存し地域の歴史や文化を語る上で欠くことのできない志段味大塚・大久手古墳群や河岸段丘等の地形の適正な保存は、上志段味特定土地区画整理事業等の開発が進む地域にあって、文化財保護行政上の喫緊の課題である。

このような状況を踏まえ、今回策定する基本構想は、「歴史の里」の整備の基本的方向性を示すとともに、将来起こりうる課題等に対して、適切に対応できるよう、その判断の拠りどころを示したものである。

② 構想の対象範囲

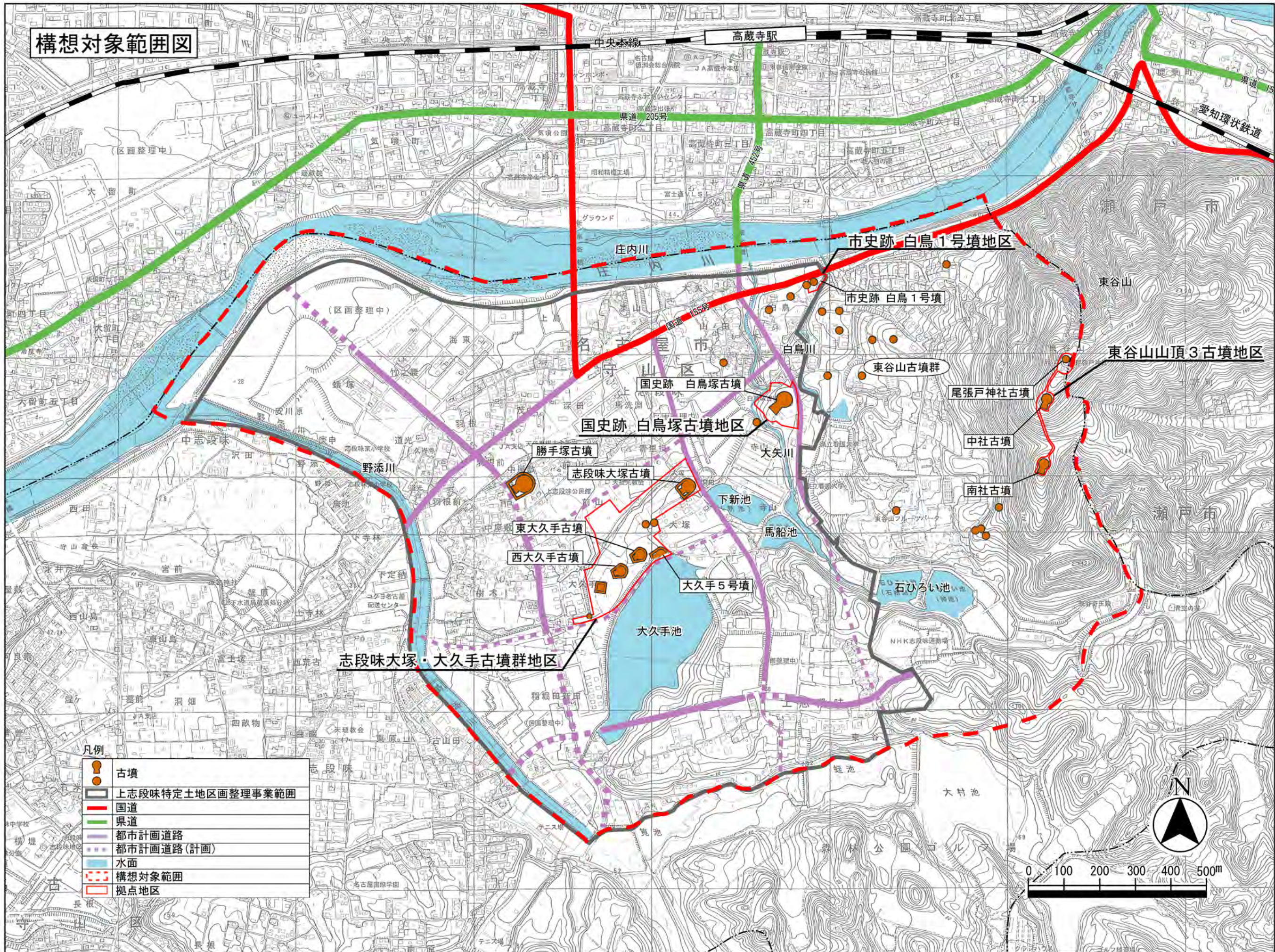
「名古屋新世紀計画2010 第3次実施計画」でいう「歴史の里」の範囲は、上志段味特定土地区画整理組合の保留地等に所在する志段味大塚・大久手古墳群を中心に、国史跡白鳥塚古墳、市史跡白鳥1号墳を含めた区域を想定しているが、今回の「歴史の里」基本構想の対象範囲(以下「構想対象範囲」という)は、上志段味地区の特色を踏まえ、これらの古墳に加え、東谷山山頂の古墳や東谷山西麓の古墳群を取り込んだものとする。具体的には、北は庄内川、西は野添川、南は森林公園の北側、東は東谷山の南北に走る尾根筋(概ね瀬戸市との市境界)で囲まれた範囲とする。

なお、この構想対象範囲外にある文化財や観光施設についても必要に応じて連携を図っていくものとする。

③ 拠点地区

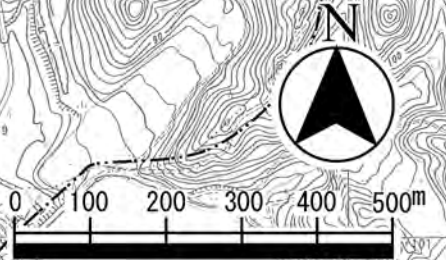
構想対象範囲は大半が私有地である。そのため、道路、住宅地等の生活空間となっておらず、整備に向けての条件が比較的整っている「東谷山山頂3古墳地区」、「市史跡白鳥1号墳地区」、「国史跡白鳥塚古墳地区」及び「志段味大塚・大久手古墳群地区」を「歴史の里」として整備をめざす拠点地区と位置づけるものとする。(19頁「構想対象範囲の地区区分と拠点地区の設定」参照)

構想対象範囲図



凡例

	古墳
	上志段味特定土地区画整理事業範囲
	国道
	県道
	都市計画道路
	都市計画道路(計画)
	水面
	構想対象範囲
	拠点地区

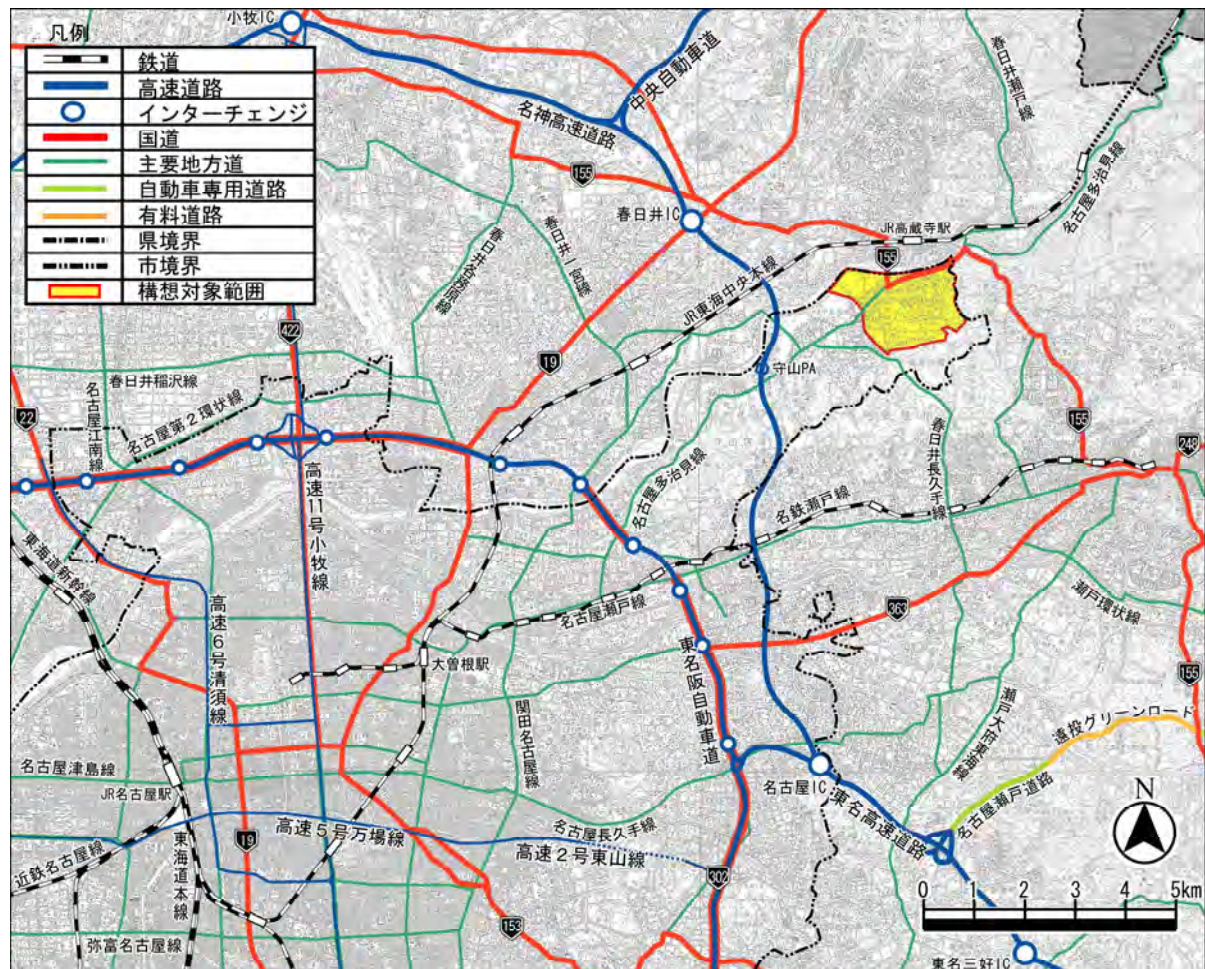


第2章 構想対象範囲周辺の環境

(1) アクセス

名古屋市は、愛知県の西部に位置し、面積326.45km²を有する県庁所在地である。構想対象範囲は名古屋市の東北部にあたる守山区に所在しており、北は春日井市、東は瀬戸市、南は尾張旭市に隣接しており、名古屋市中心市街地から北東方向約15kmのところにある。

構想対象範囲へのアクセスは、東名高速道路（春日井ICから約5km、スマートICの整備が計画されている守山パーキングエリアからは約3.5km）のほか、構想対象範囲の北を通る国道155号や県道名古屋多治見線などがあり、大曾根駅（東区）と高蔵寺駅（愛知県春日井市）を結ぶ新交通システム・名古屋ガイドウェイバス（ゆとりーとライン）が運行されている。また、鉄道では、JR中央本線高蔵寺駅（愛知県春日井市）が最寄り駅で、国史跡白鳥塚古墳へは南へ約1kmとなっている。



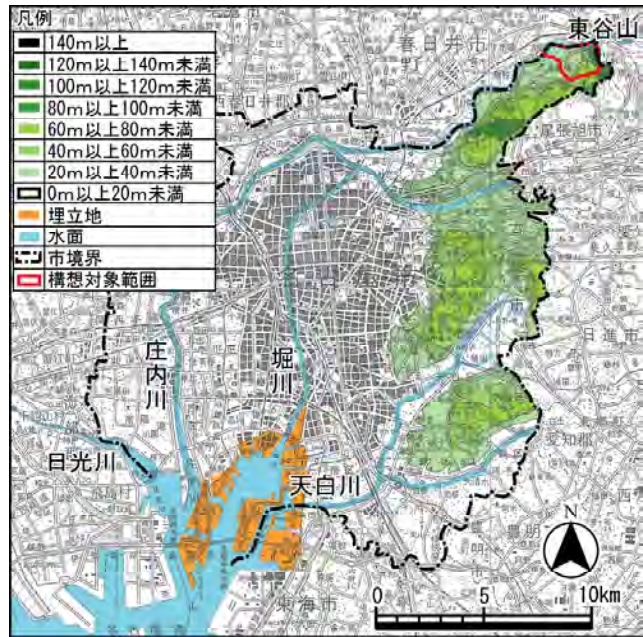
周辺交通網図

(2) 自然環境

①地勢

名古屋市は、本州中央部の濃尾平野に位置し、伊勢湾に南面する緩やかな東高西低の地勢である。市内を北から南に庄内川、東から南に天白川が流れ、市の中心部では、名古屋城築城の際に開削された運河(堀川)が南流している。名古屋市の中央部は、新生代第四紀の洪積層で、地盤も安定しているため、商業・住宅地として発展してきた歴史がある。海岸部に広がる低地は近世以降の埋め立て地である。

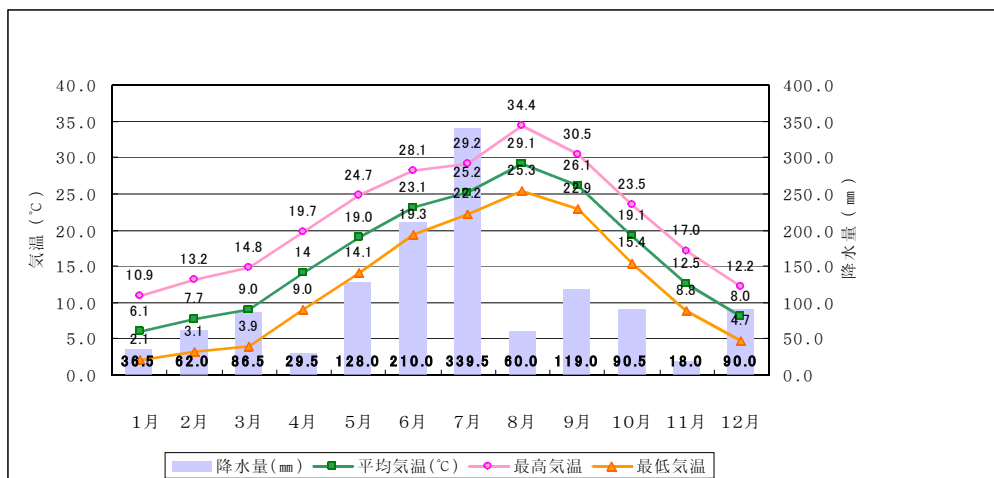
構想対象範囲のある守山区は、市域東北端の東谷山(標高198.3m)を最高所として標高50~100m程のなだらかな丘陵が続く、河岸段丘の地形が良く残された地域である。



地形標高図

②気候

名古屋市の気候は、平成19年のデータによると年間平均気温18.2℃、年間降水量1,269mmとなっている。年間降水量の全国平均値は1,550mmであり、全国平均と比べると比較的降水量が少なく、概して穏やかな気候であるが、東海式気候に属しており、冬季には「伊吹おろし」とよばれる冷たい季節風が吹き、寒さが厳しくなるが、夏季には最高気温が35度近くまで上がり、季節による寒暖の差が激しい。夏は台風の進路にあたるため、降水量も比較的多い。なお、近年降雪はほとんどみられない。



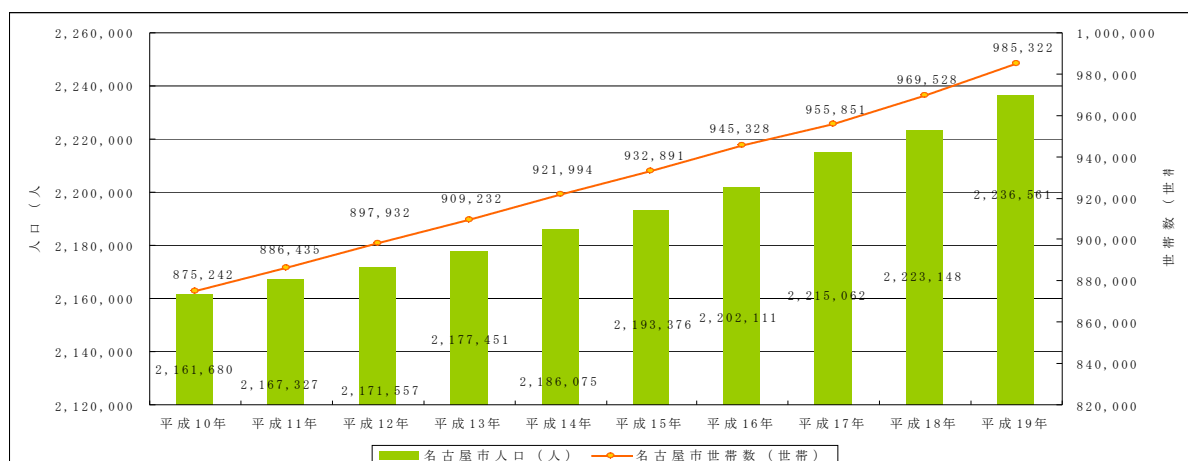
平成19年の名古屋市の年間降水量と気温

(3) 社会環境

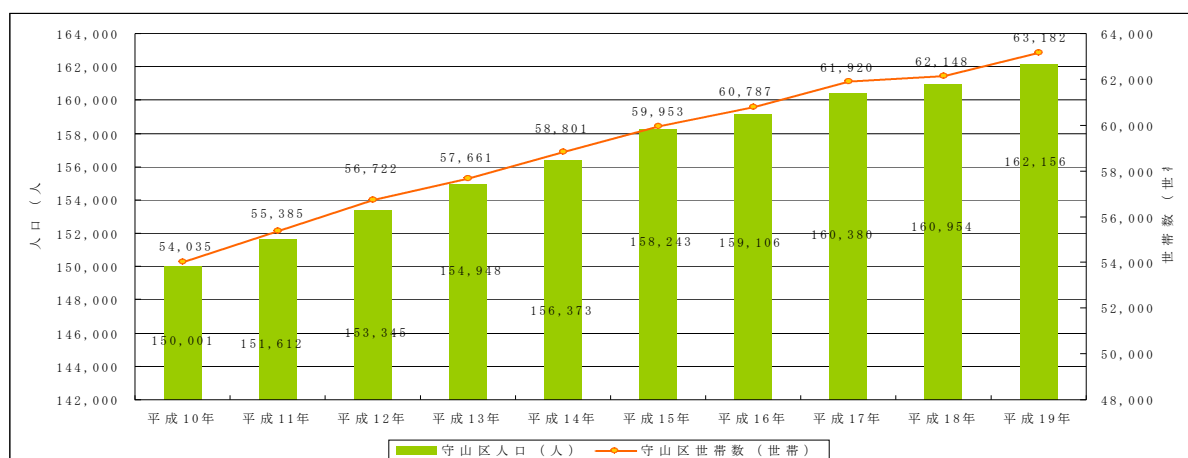
①人口・世帯数

名古屋市の人口は、2,250,029人、世帯数は、1,001,608世帯であり、守山区の人口は、165,361人、世帯数は、65,270世帯である(平成20年12月1日現在)。名古屋市、守山区とも、人口・世帯数は、共に増加傾向にある。

特に守山区は、現在、ほぼ全域で宅地開発が盛んになり、人口は増加し続けている。



名古屋市の人口及び世帯数



守山区の人口及び世帯数

②産業

平成19年度工業統計調査によると名古屋市の産業別就業者数の割合は第一次産業が0.02%、第二次産業が18.14%、第三次産業が81.84%である。近年は第一次産業就業者数の減少が見られるが、政令指定都市であり、商業の中心地である名古屋市は、集客力のある商業地帯の存在を活かして、第三次産業の就業者数を増加させている。

また、一方で愛知県は全国有数の工業県であり、第二次産業も盛んである。製造業全体での出荷額は約4兆4千億円で全国1位である。そのうち愛知県全体の一般機械製造業出荷額は約4兆2千億円であるが、名古屋市のそれは約1兆円にもなり、愛知県全体のおよそ4分の1に達している。

(4) 歴史的環境

①築城以前の名古屋

この名古屋の地に人々が居住を始めたのは、今からおよそ3万年も前の旧石器時代のことであるが、市内のわずかな地点からこの時代の石器が出土しているにすぎずその実態はまだ解明されていない。この時代に続く縄文時代は、およそ1万2千年ほど前に始まった。緑区上ノ山、銚ノ木、南区粕畑、瑞穂区欠上、大曲輪などで小規模な居住地跡が発見されている。縄文時代が終わりを告げる3千年ほど前には、守山区牛牧、緑区鳴海雷などに規模の大きな集落も誕生したが、稲作と金属器を携え、北部九州に上陸した渡来人たちの文化と入れ替わる。弥生時代の幕開けである。西区貝田町付近に最初の集落を築いた弥生人たちはその後も次々に居住空間を広げ、熱田区高蔵周辺、瑞穂区牧町一帯に大集落を形成する。3世紀後半、近畿一円を掌握しつつあった王権は、前代にはない巨大な墳墓を造営しその力を誇示するようになる。古墳時代の到来である。尾張部でも最古の部類に属する守山区白鳥塚古墳(国史跡 前方後円墳)が庄内川の喉元に忽然と姿を現す。4世紀中頃のことである。これ以降、名古屋の台地部にも次々と前方後円墳が造られるが、5世紀末には、伊勢湾を望む熱田台地の西縁に、この地方を翼下に治めたことを示すかの如き東日本最大級の前方後円墳「断夫山古墳」が誕生する。この古墳こそが、大和王権と強力な関係を構築した尾張国造の記念碑的な首長墓である。

645年、隋・唐の律令制に倣った律令国家体制が成立し、体系的な土地支配体制が確立する。この地方には山田、愛智、智多など8郡からなる「尾張国」が置かれたが、国衙は中島郡の稲沢に設置された。政治の中樞がこの地から離れたこともあり、古代中世をとおして名古屋は歴史・文化の表舞台から遠のくこととなる。ただ、古代中世をとおしてこの地域が名をなしたのは、名古屋の東部丘陵地から猿投山に至る丘陵地一帯が日本一の窯業生産地であったことである。歴史の表舞台に再び尾張地方が登場するのは、信長・秀吉・家康が割拠した近世前夜を迎えるころである。周知のように、戦国動乱の時期にこの3人が、この地方で活躍したことは確かであるが、天下統一の舞台は、京・大坂・江戸であり、この名古屋の地は残念ながら前代に引き続き政治・文化の中心地とはなり得なかったのである。

②名古屋城と城下町の形成

ほぼ日本全土を掌中にした家康は、慶長13年(1608)、尾張一国を九男義直に与え清須城に入封させた。翌年義直の居城として、また西方大名の抑えとして名古屋城の築城を決意し、同15年豊臣恩顧の諸大名に命じて城普請を開始する。城郭は同17年にほぼ完成し、同19年には本丸御殿の完成を見た。この間に、領国統治の中心を清須城から名古屋城に移し、併せて城下町の整備にも着手する。城下は整然とした地割り、町割りが行われ、商人・職人の居住地から社寺に至るまで敷地を指定し、清須の城下を町ごと移動させたのである。これが世に名高い「清須越し」である。以後清須越しの人々や、築城に携わった人々によって、城下は賑わいを続けていく。ここに初めて現在の名古屋の町としての始まりを見ることができる。

③近代都市への変貌

明治4年(1871)、廃藩置県により名古屋県が置かれたが、翌年には尾張、三河を含めた愛知県となり、名古屋は第一大区と呼称されることとなった。明治22年(1889)市制施行により名古屋市が誕生し、中京圏の中心都市として発展を始める。道路、公園、下水道、港湾施設などの都市基盤整備が積極的に開始され、商・工業施設の近代化が進んでいく。大正9年(1920)には、旧都市計画法の施行にともない、名古屋市でも都市計画区域が決定され、用途に応じた区域が定められた。また、大正初期から始まっていた耕地整理や区画整理も、第二次世界大戦を迎える頃まで市内の各所で行われた。

第二次世界大戦で、市域の約四分の一を焼失した名古屋市は、既定の街路、公園計画などをすべて見直し、新たな復興都市計画を作成し都市の再整備に取りかかった。戦災の著しかった都心部で、戦災復興土地区画整理事業を興し、我が国における都市計画のモデルと称賛された都市づくりが実施された。一方郊外地では、膨らみ続ける都市人口の受け皿として、昭和30年代には、民間施行による区画整理事業が東山から鳴海の東部丘陵地で次々に開始された。

昭和52年、21世紀のあるべき都市像を見据えた名古屋市基本構想が策定された。続いて昭和63年には名古屋市新基本計画が策定公表され、「良好な自然環境や文化遺産などの資産を生かしながら優れた都市景観や文化環境の創造を図り、潤いと魅力にあふれた都市をめざす」こととした感性ゆたかなまちづくりを推進していくこととなった。これに呼応して、名古屋市は「都市景観建造物」の選定、「町並み保存地区」の選定、「歴史の里」構想など都市景観や自然環境と一体となった歴史的景観の保存活用を目指した施策を計画した。

第3章 構想対象範囲の概要

(1) 敷地条件

①地形と地質

構想対象範囲は、名古屋市東北端の守山区に位置し、守山区東端の東谷山は、標高198.3mで名古屋市内の最高峰である。構想対象範囲北側には庄内川が西流し、西側の野添川等は北流して庄内川に流入する。

庄内川の左岸には、何段かの河岸段丘が形成されている。中位段丘及び低位段丘は、平坦度が高く、高位段丘は、上志段味の東谷山山麓から中志段味にかけて丘陵部に局所的に分布している。

東谷山は、主に東麓から山頂部にかけて熱変成を受けた泥質のホルンフェルスが、西麓には変質の進んだ花崗岩が露出している。また、山麓はチャートや濃飛流紋岩類の円礫から成る段丘堆積物が分布している。

平成19年に、これまで東谷山域には分布していないとされた濃飛流紋岩の露頭が東谷山中腹で確認された。風化が著しく、露岩なのか崖錐堆積物や段丘堆積物の礫なのかは判然としないが、白鳥塚古墳の葺石として利用されている約4割の岩石が濃飛流紋岩の角礫であることが確認されているところから、東谷山域のどこかにこの岩石が分布しており、そこからこの角礫が運ばれ利用されたことが想起される。

②植生

構想対象範囲の大部分が居住地域、農耕地域で占められており、わずかに残っている樹林地も二次林で、常緑針葉樹林、落葉広葉樹林が大半を占めている。庄内川に沿う沖積地には小規模の竹林及び草本類が分布し、シイ属類、カシ類等一部の自然植生が社寺林として残っている。構想対象範囲内にある勝手塚古墳は、勝手社の境内にあり、墳頂のヒノキは名古屋市の保存樹に指定されている。東谷山山頂の尾張戸神社古墳、中社古墳、南社古墳周辺は、シイノキ、アラカシ等を主とする常緑広葉樹に覆われた自然度の高い暖林帯を形成し、下木には、クロバイ、ヤブツバキ、ソヨゴ、アセビ、ヒサカキ等が繁茂している。林床にはトウゴクシダを始めとする各種のシダ植物が多い。ちなみにトウゴクシダは、本市のこの東谷山に由来して命名されたものである。

また、東谷山一帯及び森林公園付近の地域には、日本での分布が名古屋地域周辺に限られているイヌナシ、シデコブシ等、植物学上貴重な種が知られている。

③景観

構想対象範囲は、東は東谷山、南は森林公園、西は野添川、北は庄内川に囲まれた地域である。東谷山は名古屋市内で最も高い山であり、山頂からは構想対象範囲はもとより遠く名古屋市中心市街地まで望むことができる。東谷山西麓から庄内川にかけては、河岸段丘による階段状の平坦面が続き、近世以前からのため池もみられる。北を限る庄内川は、東から西へ川幅を広げつつ蛇行し、野添川等の北流する河川は庄内川へと流入する。このように緑と水と段丘によって変化に富む景観が広がる当該地であるが、近年は国道に沿って市街化が進み、さらに区画整理事業による宅地造成で都市的景観へと変化しつつある。国史跡白鳥塚古墳や、現在は勝手社が墳頂に鎮座する勝手塚古墳等は住宅地の中に貴重な緑を残している。



大久手池から東谷山を望む



東谷山山頂からの眺望

④法規制

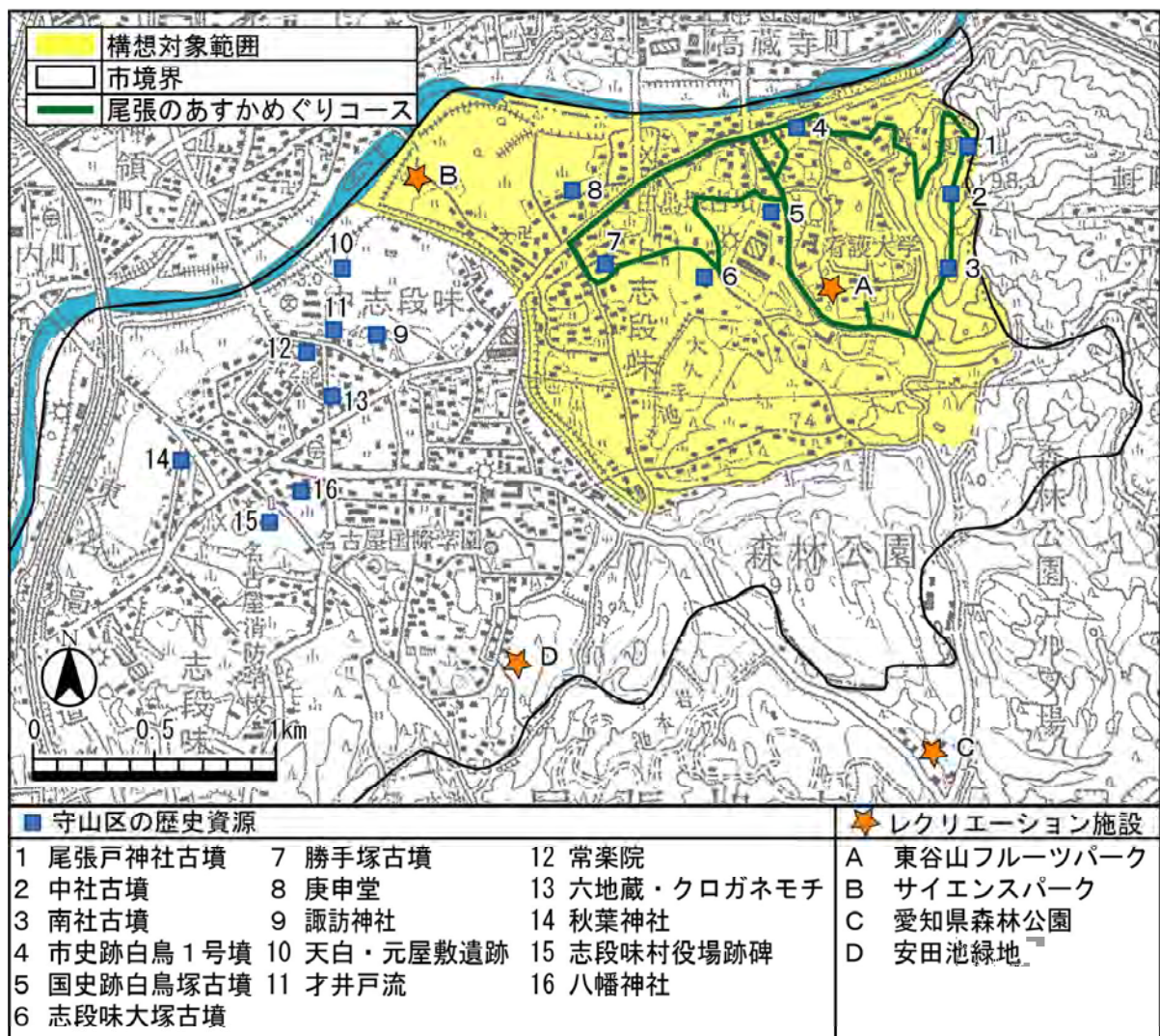
守山区上志段味地区（構想対象範囲及び周辺）に係る主な法規制は、以下のとおりである。

- 文化財保護法に基づく史跡指定地（白鳥塚古墳）
- 都市計画法に基づく都市計画区域(全域)及び市街化区域・市街化調整区域・用途地域・土地区画整理事業施行区域（土地区画整理法）・風致地区（第1種）
- 農業振興地域の整備に関する法律に基づく農業振興地域・農用地区域
- 森林法に基づく保安林
- 鳥獣保護及狩猟に関する法律に基づく鳥獣保護区・銃猟禁止区域
- 砂防法に基づく砂防指定地域

各区域等の指定状況を見ると、東谷山および西麓に市街化調整区域、風致地区、鳥獣保護区、農用地区域などの指定がみられ、庄内川流域は市街化調整区域、その他は市街化区域の中でも主に住居系用途地域となっている。山地以外では勝手塚古墳の上に建つ勝手社が風致保安林となっている。国道に沿って一部商業系用途地域や準住居地域等の指定がなされており、土地区画整理事業の促進に伴って一層の市街化が予想される。

(2) 観光レクリエーション

構想対象範囲及び周辺の観光レクリエーション施設は、主に自然や歴史に関する施設である。構想対象範囲内には、「尾張のあすかめぐり」と称する古墳等をめぐる史跡散策コースが設定されているが、このコースは、国史跡白鳥塚古墳や、現在市内で見ることのできる唯一の横穴式石室をもつ市史跡白鳥1号墳などをめぐり、市内で最も高い東谷山へ至るコースである。眺望に恵まれた東谷山山頂には展望台が設置され、山頂までの散策路も整備されている。山麓に位置する東谷山フルーツパークは、果樹をテーマにした農業公園で、近年はシダレザクラの名所としても知られている。愛知県森林公園は、尾張旭市と名古屋市守山区に広がる面積約428haの広大な森林の中に運動施設・植物園・一般公園があり、一部が構想対象範囲に含まれている。



周辺の歴史・観光資源図

第4章 志段味古墳群の概要と特徴

(1) 志段味古墳群の概要

①志段味古墳群の概要

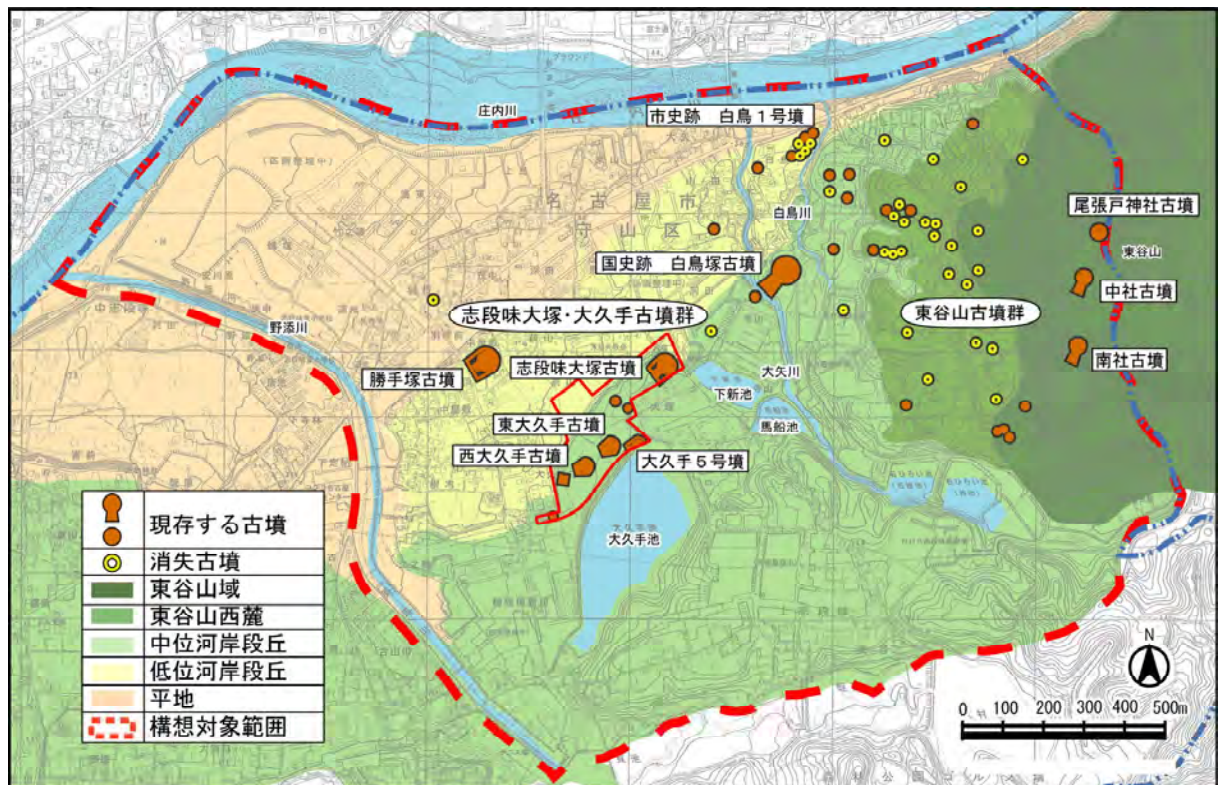
名古屋市内では約200基の古墳が確認されており、このうち約半数が守山区に集中している。中でも約60基が確認されている上志段味地区は、古墳の密集地として知られている。

上志段味地区の庄内川南岸の河岸段丘上には、市内では最も早く、4世紀中頃に白鳥塚古墳が築かれた。東谷山山頂付近には、この白鳥塚古墳とほぼ同時期に築かれたといわれる尾張戸神社古墳、中社古墳、南社古墳が所在し、立地を異にした前期古墳が近接して築かれている。

中期になると、庄内川南岸の河岸段丘端部に、西大久手古墳、東大久手古墳、志段味大塚古墳という帆立貝式古墳が連続して築かれた。これらの古墳は、その周囲の円墳や方墳などとともに志段味大塚・大久手古墳群を形成している。また、少し西に離れた地点にも、後期初頭の帆立貝式古墳である勝手塚古墳があり、河岸段丘の端部に帆立貝式古墳が集中して分布している。

後期には、東谷山西麓に小規模な円墳からなる6世紀末～7世紀にかけての群集墳が形成された。これらは東谷山古墳群と呼ばれているが、この中には、市史跡白鳥1号墳のように、石室の残りがよく、現在でも内部が観察できるものがある。

このように、上志段味地区には、東谷山山頂、東谷山西麓、庄内川南岸段丘上という様々な立地に、前期から後期までの各時期の古墳がほぼ連続的に築かれている。これらの古墳を総称して、志段味古墳群と呼ぶ。



志段味古墳群の古墳分布状況図

②各古墳の概要

志段味古墳群は、東側は東谷山の山頂から西側は庄内川の低位段丘まで、東西約1.6km、南北約1kmの範囲に分布する。ここでは、各古墳の分布する場所の地形別に主な古墳の概要をまとめる。

立地	名称	概要
東谷山山頂	尾張戸神社古墳	東谷山の尾根上に立地する。墳長約55mの前方後円墳もしくは前方後方墳、あるいは直径約30mの円墳などの説がある。葺石に国史跡白鳥塚古墳との共通性が認められることから4世紀中頃の築造であると推定される。墳丘上には尾張戸神社が鎮座しており、社殿の建設にともなって墳丘が改変されているため、遺跡の保存状態はあまりよくない。現在は寺社有地である。
	中社古墳	東谷山の尾根上に立地する。墳長55m～60mの前方後円墳と推定されている。出土した埴輪の形などから4世紀後半の築造と考えられ、畿内の大型前方後円墳との関連が指摘されている。また葺石の存在が確認されている。後円部頂には祠が設置されており、墳丘斜面にはそこへ至るための石段が設けられている。現在は寺社有地である。
	南社古墳	東谷山の尾根上に立地する。これまでに行われた測量などの成果から、墳長約55mの前方後円墳であるとする説が有力であるが、円墳であるとする説もある。葺石や埴輪の存在が確認されているところから、古墳時代前期後半の築造と考えられる。墳頂部には祠が設けられている。現在は寺社有地である。また墳裾の一部は県有地と思われる。
東谷山西麓	東谷山古墳群	東谷山西麓に所在する古墳時代後期の群集墳である。約50基の円墳が確認されており、尾張地方最大級の規模を誇る。
	市史跡白鳥1号墳	東谷山西麓の低位河岸段丘上に立地している。直径約17mの円墳である。昭和36年に石室床面の精査が行われ、須恵器や馬具、大刀等が出土している。出土遺物などから6世紀末～7世紀初めに築かれたものと考えられる。横穴式石室は開口している。石室の規模及び形状は全長約9.8m、幅約1.6m、高さ約2.4mで羨道の前に八の字形に開く前庭部が設けられている。現在は私有地である。

立地	名称	概要
庄内川南岸 河岸段丘	志段味大塚・大久手 古墳群	庄内川の南岸、中位河岸段丘の端部に4基の帆立貝式古墳と3基の円墳、1基の方墳が現存している。現在は、土地 区画整理組合の保留地等となっている。
中位段丘	志段味大塚古墳	志段味大塚古墳は、墳長約55mの志段味大塚・大久手古墳群 中最大の帆立貝式古墳である。5世紀後葉の築造と考えら れる。後円部の南側は土取りによって墳丘の破壊が著しい が、その他の部分は良好に遺存しており、周濠も埋没して いるものの保存状態がよい。大正12年(1923)に京都帝国大 学の梅原末治博士によって発掘調査が実施されたほか、平 成17年からは名古屋市教育委員会が発掘調査を実施し、埋 葬施設を確認したほか、特異な葺き方の葺石や埴輪を検出 した。
	東大久手古墳	墳長約37.5mの帆立貝式古墳である。前方部の削平が著し く、その形態や規模が不明であったが、平成17年に行われ た発掘調査によって詳細が明らかとなった。また、平成20 年に実施した発掘調査では、円筒埴輪が築造当時の位置を 保ったままで残存していることが判明した。出土した須恵 器の型式などから5世紀末の築造と考えられる。
	西大久手古墳	墳長約36mの帆立貝式古墳である。後世の削平や盛土によ って墳丘の改変が見られる。平成17年に実施された発掘調 査によって、古式の馬形埴輪が出土しており、東海以東で 最古の事例と見られている。また、平成20年に実施した発 掘調査では、鶏形埴輪や東海以東で最古級の人物埴輪が出 土した。遺物の特徴などから5世紀中頃の築造と考えられ る。
	大久手3号墳	従来、直径10m前後の円墳と考えられてきたが、平成19年 に行われた発掘調査によって、L字状に曲がる周濠が発見 され、一辺15m程度の方墳と判明した。周濠内からは埴裾 部分に供えられた須恵器が出土している。5世紀後半の築 造と考えられる。
	大久手5号墳	近世の時点で既に大久手池の堤防の中に取り込まれており、 墳丘の規模については不明である。平成17年に行われた発 掘調査によって、墳丘に並べられていた円筒埴輪の基底部 が検出されている。5世紀後半の築造と考えられる。
	国史跡白鳥塚古墳	庄内川の中位河岸段丘端部に立地する墳長115mの前方後円 墳である。これまで行われてきた発掘調査で埴輪が見つか っていないことや墳丘の形態などから、4世紀中頃に築か れた古式の前方後円墳であると考えられている。石英等で 葺石が葺かれており、かつては墳丘が白く輝いて見えたこ とから白鳥塚の名が付いたとの伝承がある。墳丘の遺存状 態は良好であり、歴史的価値が高いことから公有地化され 国史跡に指定されている。
低位段丘	勝手塚古墳	庄内川の低位河岸段丘上に築かれた墳長約53mの帆立貝式 古墳である。墳丘上には勝手社の社殿が建てられているが、 2段に築かれた墳丘や周濠がよく残っている。平成20年 に行われた調査によって埴輪列が確認されている。6世紀初 頭の築造と考えられている。現在は寺社有地となっている。

(2) 志段味古墳群の特徴

(ア) 日本の古墳時代の縮図

志段味古墳群は、上志段味地区という狭い範囲の中に、古墳時代の前期から後期までの古墳が連綿と築かれていること、そして、その古墳の墳形も、典型的な前方後円墳のほかに、帆立貝式古墳、円墳、方墳があり、多様であることを特徴としている。また、各古墳がそれぞれ、東谷山山頂、山麓、河岸段丘という地形をいかして築かれていることも特徴として挙げることができる。このように、古墳時代各時期の多様な形態の古墳が集中している志段味古墳群は、日本の古墳時代の縮図であると言える。

(イ) 志段味古墳群築造集団の性格

志段味古墳群は、庄内川が濃尾平野に流れ出る交通の要衝に位置しており、各時期の古墳には、当時の中央政権である大和王権との関わりの強さが示されている。

前期の典型的な前方後円墳である白鳥塚古墳は、近畿地方の大型古墳に類似する墳丘形態を持っている。尾張に造られた最古級の大型前方後円墳であり、大和王権との密接な関わりのもとで築かれたと言える。

中期古墳でも、当時最先端の馬具が出土した志段味大塚古墳、最古級の人物埴輪や馬形埴輪などが出土した西大久手古墳などの帆立貝式古墳は、これらの古墳を築いた集団が大和王権に重視され、深い関わりを持っていたことを示している。

このように、志段味古墳群は、東日本への関与を強める大和王権との密接な関わりのもとで築かれた古墳が多いことも特徴としている。

(ウ) 志段味古墳群の可能性

志段味古墳群は、このような特徴を持つ重要な古墳群であることがこれまでの調査によって明らかになってきた。しかし、まだ解明されていない問題も残されている。

山頂にある尾張戸神社古墳、中社古墳では、白鳥塚古墳で見られるのと同様な白色の葺石が確認されており、関連する古墳であることは確かだが、これらの立地を異にする古墳の被葬者がどのような関係にあったのかは今後の検討課題である。また、古墳群の変遷をより微細に見ると、白鳥塚古墳や東谷山山頂の前期古墳と中期の帆立貝式古墳群の間、中期を中心とした帆立貝式古墳群と群集墳の間には、それぞれ若干の時間的な不連続があり、その意味はまだ明らかではない。

さらに、これらの古墳群を築いた集団が大和王権ときわめて強い関わりを持っていたことはわかかってきたが、庄内川の対岸の春日井市域に古墳を築いた集団や、現在の名古屋市中心部に古墳を築いた集団などの近隣集団との関連はまだ十分に把握できていない。

志段味古墳群は、日本の古墳時代の縮図のような古墳群であり、その未解明の問題の解決は、尾張の歴史を明らかにするだけにとどまらず、日本の歴史を考える上でも重要な意義を持つ。このような未解明の問題の検討を通じて、志段味古墳群は、日本の古墳時代の歴史を明らかにするという学術的目的に寄与できると言える。